通巻552号

紅葉坂

教会だより

2015年3月号 No.13
横浜市西区宮崎町1
日本キリスト教団
紅葉坂教会
牧師 岩橋常久
伝道師 川上咲野

説教

「誰だか知りたい人」

岩橋常久

イエスが言われた。「それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか。」
ルカによる福音書　9章20節

工事資金の献金が始まる。教会歴は受難節。この二つの状況にいる私たちは、イエスが一人で祈っておられた時、私たちもそこにいると想像しながら今日の聖句を読もう。これは私たちが聖書を読む基本的な信仰者の姿勢。この場所は「フィリポ・カイサリア地方」（8・27）。そこには「パン神」が祀られ、近くには皇帝像を安置した大理石の神殿があった。異教的な所でイエスが弟子たちに信仰告白を求められたがルカ福音書には地名はない。イエスを誰と言うかは、どこでもいつでも問われるからだ。

ルカ福音書は紀元80年頃ローマ近郊で書かれた。ネロの迫害があり、やがて別の皇帝のさらに激しい迫害が起こる時。ルカはその状況で教会のリーダーのペトロが「イエスを神からのメシアです」と告白した出来事を伝える。

マタイはこの信仰告白の出来事がイエスの生涯の重大な分岐点であったのに注目する。「このときから、イエスは、ご自分が必ずエルサレムに行って。…多くの苦しみを受けて殺され、三日目に復活することになっている、と弟子たちに打ち明け始められた。」（マタイ16・21）。「分岐点」は「分水嶺」とも表現可能。分水嶺は雨が西へと流れるか東に流れるかの分岐点。そこは尾根とも言われ、山を横から見たら稜線ともよばれる。この稜線から先は「山の向こう」だ。稜線をこえたら新しい視界が開ける。

ではこの分水嶺となる信仰告白の出来事の先に見えてくるのはどのようなイエスだろうか。イエスは私たちに「群衆は、わたしのことを何者だと言っているか」と尋ねる。私たちは弟子たちと共に『洗礼者ヨハネだ』と言っています」と言う。追いかけてイエスは「それでは、あなたがたはわたしを何者だというのか」と問われる。原語では「あなたがたは」は強調された言葉、他の誰でもない、「あなたがたはどうなのか」。これに私たちは言い逃れしない覚悟で答えなければならない。この切迫した状態は「終末的」。世の終わりに臨んだ状態ということ。

今回の崖崩れは「試練」と言われる。教会は逃れることのできない困難な事態に陥った。なんとかせずにすまされない終末的な事態だ。あなたがたはどうするのか。被害者、近隣の人たち、行政から問われている。信仰者としてはイエスから問われている。さらに「あなたがたはわたしを誰だというのか」とも問われている。ここに私たちの「分水嶺」がある。工事資金の献金はこの信仰告白と一つ。

「試練」には「ふり分ける」「テストを受ける」という意味がある。ペトロは、「あなたは神からのメシア」と答える。それは正解である。しかし、まだ合格ではない。分水嶺の先の新風景を見ていない。

イエスご自身が言われる風景は十字架でのイエスの死であり、「わたしについて来たい者は、自分を捨て、日々、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい」と私たちに語るイエス自身の姿である。

イエスの十字架の姿は何を明らかにしたか。第1に、イエスが十字架にかけられる時、彼を裏切った弟子たちの罪、自分中心の姿を明らかにした。第2に、その弟子たちをイエスは赦した。同時に、それは弟子たちに自分たちが赦されるべき者であると自覚させた。赦しと審きは出来事としては切り離せない。順序としては審かれて赦されるが、赦しが審きを自覚させることもある。第3に、弟子たちは罪深い者であるにもかかわらず、イエスによって神に愛されて自由にされた自分たちを見る。第4に、赦された恵みに応えてイエスに従うと、日々、責任という十字架を背負うことが見える。つまり、神に赦され、受けいれられて生きる、その生き方に十字架のイエスは招かれる。それはイエスの犠牲から来る。犠牲を払うイエスに従う私たちに赦されて生きる喜びがあるなら、私たちもイエスのために犠牲を払う日々の十字架が分水嶺の向こうに見えてくる。

（2015年3月8日礼拝説教要旨）